

――〇一〇年に「公共建築物等の木造の利用の促進に関する法律」が施行されたことが弾みとなって、近年、大型建築物の木造化や内装の木質化が進みはじめています。森林の国、木の国といわれながらRC造ばかりが建っていた頃に比べると、様变わりの状況である。保育園や図書館、学校などユニークな木造建築物が様々な雑誌にも掲載されるようになっていっている。

そうした木造化・木質化の背景には、戦後に植林された人工林が利用段階を迎えていることがある。同時に、強度が一定で狂いが生じにくい合板や集成材、そして近年注目されているCLT（クロス・ラミネーティッド・ティンバー）など利用技術の開発が進んでいることも可能性を広げている背景にある。いわゆるエンジニアリングウッド化であり、木材の材料から原料化ともいえる動きである。木材の自給率も二〇〇〇年代後半から上向いている。

しかし、最近の動きは、喜んでばかりいられるのだろうか？ 山村地域に住む人々の経済や暮らしを研究テーマとしてきた筆者にとって、疑問を感じるがあった。

ある自治体は市内の公共建築物は市内の木材を用いて建築するという林業振興計画を作成した。小学校を建設する際、担当の建築家は大径無垢材の六辺直材を年度内に何十本と発注。しかし、部材調達を担うことになった森林組合は、一〇〇本に一本取れるかどうかの材を市内で探

各 人 各 説

生物材料としての 木利用の担い手育成を

九州大学大学院農学研究院 教授

佐藤宣子

Noriko Sato



し回るのに苦労し、他の仕事が出来ないと嘆いていた。最後は、「だから山の人は商機を逃すのだ」と詰られ、「今後は集成材で」と建築家にとっても山への不信感だけが残る結果となったという。資材は必要な量、必要な時に調達できて当たり前だと言われると、エンジニアリングウッド化の方向性しか解決策はない。建築側が地域の山の状況をもっと知る努力を行い、問題が共有化されていけば解決策があったのではないかと、ため息がでた。

木は光合成によって一年一年と年輪を刻んで成長する生物材料である。樹種や品種にかえて、土壌条件、そして枝打ちや間伐など育林過程での人手の入れ方によっても個体差が生じる。その木の個性を活かす建築物が作られることは地域の自然に合った建築のあり方を考えることにも繋がるだろう。

「伐採した時に分かるのよ、これこれ。嫁に来て山に入るようになってから枝打ちした跡だつて。子供が小学校の頃に間伐した頃の年輪がこれで…」と我が子のことを語るように伐採した木材について話してくれた篤林家に嫁いだ女性の言葉が忘れられない。

山村地域に生きる人々の想いまで受け止めて、色目や強度などその木材の魅力を引き出すことでストーリーが生まれる。生物材料としての木の多様性を知り、そのおもしろさを活かす建設の担い手の育成を願っている。